Japanese Association for Research in Family Nursing

日本家族看護学会
NEWS Letter

第4号

発行日　2010.12.12
日本家族看護学会
広報・渉外担当　発行

2010年度 日本家族看護学会第17回学術集会開催

9月18日・19日名古屋の愛知県産業労働センター「ウインクあいち」

第17回学術集会を終えて

愛知県立大学看護学部　　山口　桂子

9月半ばを過ぎてもなお夏の暑さが残る名古屋の地で、日本家族看護学会第17回学術集会を、2010年9月18日、19日の両日、「家族看護実践にいかす“研究”」をメインテーマとして開催することができました。

研究と実践をつなぎ、研究をいかに活用できるかを探ることが今回のテーマでしたが、そのための第一歩として、できるだけ多くの方に家族看護に関心を持っていただき、ご参加いただきたいと考えて広報活動に力を注ぎました。その甲斐もあってか、800名をこえる方々のご参加をいただき、特に、愛知県を中心として多くの臨床現場からのご参加があったことは、企画者としても大きな喜びでありました。

プログラムとしては、特別講演、一般演題（口演40題・ポスター発表55題）のほか、テーマセッション4題、交流セッション4題、ビデオセッション1題と、様々な領域からの多数のご発表があり、家族看護の対象の拡がりやニーズをあらためて実感いたしました。また、2つのシンポジウムでは、家族看護学の本質に迫る討議が、会場参加者も交えて展開されたことは有意義であったと思います。さらに、本学会理事会からも、家族看護のイノベーションをテーマにした特別企画や次年度の国際学会に向けたセミナーなどが企画され、多くの方が熱心に参加されました。

大会長山口先生の基調講演

家族形態や価値観の多様化に伴い”家族”の問題が顕在化する昨今、臨床現場ではより即効性のある家族看護実践が模索され求められていますが、各会場での熱意と活気あふれる”やりとり”は、これからの家族看護実践を確実に推し進めていくであろうことを実感いたしました。

開催にあたり、ご講演をいただいた先生方や会員の皆さまをはじめとして、ご指導ご協力をいただきましたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

日本家族看護学会第17回学術集会に参加して

徳島家族看護実践研究会代表　徳島大学病院　平岡峰子

9月18日（土）・19日（日）、まだ夏の日差しの残る名古屋で、「家族看護実践にいかす“研究”」をメインテーマとして第17回学術集会が開催されました。

私は、大学病院に勤務する臨床ナースですが、お一人お一人の患者とその家族へのケアがどうあるべきなのか、どのように援助していくべきなのか、日々スタッフとともに考えながら業務をしています。メインテーマにもあるように、「家族看護実践にいかす“研究”」は、臨床ナースにとって、看護実践だけではなく課題であると考えていますが、とても大きな収穫のある学術集会の内容であったと思っています。

また、私にとっては、毎年懇親会で先生方とお会いして、いろいろなお話をさせていただくのも学会参加の楽しみのひとつなのですが、今年も先生方の家族看護への情熱を感じ、エネルギーをたくさんいただきました。「学術集会からかえって明日からの臨床にこんな風にいかしてみよう」「今度の研究会では参加したナースにこんなことを伝えてあげよう」等、毎年のように先生方からお力をいただいています。

次年度18回の学術集会と国際学会に向けて、家族看護の研究と実践がつながっていく、とても貴重な二日間の学術集会だったと感じています。ありがとうございました。

第17回日本家族看護学会学術集会の事務局を担当して

愛知県立大学看護学部　赤松　園子

9月18日、19日の2日間、名古屋の愛知県産業労働センター「ウインクあいち」にて、第17回日本家族看護学会学術集会が開催されました。今年は記録的な猛暑の影響で、9月半ばとはいえ、最高気温は30℃を超えておりましたが、多くの方々が参加され、家族看護に対する関心の高さを窺い知ることができました。

私は、本学術集会の事務局スタッフとして、開催の約一年ほど前から学会準備に携わらせていただきました。学術集会が準備段階から開催までどのように進められているのか、その全過程を通して見せていただくのは初めてでした。学術集会のプログラムの順番や各会場の位置、必要物品の配置など、開催前日まで確認やシミュレーションをしましたが、自分の役割が十分果たせるか、当日は不安と緊張でいっぱいでした。しかし、学会運営にご協力いただいた多くの方々から、不安顔の私に優しいお声かけをいただいたことで、学術集会がスタートすると、不安や緊張よりも、とにかく自分のできることを精いっぱいやろう、そして学術集会を楽しもう、という気持ちに切り替わっていきました。

こうして多くの皆様のご協力を得て、大盛況の内に学術集会は閉会し、充実した二日間で、多くの貴重な経験をさせていただいたと感謝しております。今まで深く考えずに参加していた学術集会ですが、今回の経験を通し、本当に多くの方々の熱意あふれるご協力なくしては、成立し得ないということを再認識させていただきました。

学術集会の運営に携さわらせていただいたことで、以前に増して家族看護に興味を持つことができ、今後さらに深めていきたいと感じております。このような貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

日本家族看護学会

【事務局】
〒261-0014
千葉市美浜区若葉2-10-1
千葉県立保健医療大学健康科学部

Tel/Fax：043(272)2869
E-mail:
family_chiba_u_2007@yahoo.co.jp

ホームページもご覧ください。
http://square.umin.ac.jp/jarfn/

日本家族看護学会
＜広報・渉外担当＞
泊祐子、浅野みどり、
甘佐京子、山本真実、
古澤亜矢子

＜家族看護CNS活動報告＞

家族支援専門看護師のメディエーション機能

近畿大学医学部附属病院　看護部
家族支援専門看護師　藤野崇

2010年7月31日と8月1日両日に、日本看護学教育学会第20回学術集会が開催され、「家族支援専門看護師のメディエーション機能」をテーマとして、交流セッションを担当させて頂きました。

現在、私は院内医療メディエーターの役割を担い、「紛争の調停」ではなく、「医療事故などで生じる患者本人を含む家族の苦悩と困難の緩和し、患者を含む家族と医療者の関係の再構築支援を行う」という家族支援実践を行っております。そこでシステムの紹介と家族へのケアに必要な力を身に付ける教育の試案をプレゼンテーションさせて頂きました。

具体的には、当院の医療メディエーションシステムの紹介と共に、「家族との関係形成」「医療者-患者・家族間の悪循環の分析」など家族看護学を基盤とし、医療事故後の家族を支援するために必要な思考のトレーニング方法を試案として提案させて頂きました。

当日は、教育に携わる方々、臨床の方々など約40名のご参加を頂き、様々な貴重なご意見を頂きました。まだ始まったばかりの取り組みではありますが、多くの方々のご意見を頂きながら、家族看護だからこそできる新しいケアのモデルを作ることに取り組んで行きたいと考えております。

＜編集後記＞
Webnews4号は、第17回の学術集会にご参加できなかった皆様にも学術集会の様子をお届けしようと山口集会長、一般参加の方、事務局の方の記事を中心に作成しました。広報・渉外担当ではできるだけ、“家族看護”について多くの皆様にご理解をいただけるために本学会学術集会の様子や家族看護に関しての活動を紹介するように情報発信をしています。そのために皆様から発信したい情報やご意見も反映できればと思っています。簡単にアクセスできる方法を思案中です。是非、時々HPをお訪ねください。（泊　祐子）